

『為頼集』 哀傷歌にみられる歌語の享受と展開

——第八二・八三番歌の唱和を視点として——

古 瀬 雅 義

はじめに

藤原為頼は、平安時代中期に活躍した勅撰集歌人である。生年は未詳だが、天慶四年（九四一）生まれと推定され、長徳四年（九九八）に没している。父は藤原雅正、母は藤原定方むすめ女。弟に紫式部の父為時がいるから、為頼は紫式部の伯父に当たる。『拾遺集』以下の勅撰集に十一首入集し、家集には自撰集とみられる『為頼集』がある。

為頼は春宮時代の花山天皇のもとに出入りして、春宮少進や権大進を勤め、また小野宮一族とも強く結びついていた。亡き藤原実頼の供養で詠じた「世のなかにあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな」⁽¹⁾は為頼を代表する歌になっている。しかし関白頼忠が円融天皇に入内させた遵子（公任姉）が皇子を産まず、兼家が入内させた詮子（道長姉）が後に即位する一条天皇を産み、さらに花山天皇が兼家たちの策動で出家し、政治を主導する家が兼家ら九条家に移ったこと⁽²⁾で、その後の官途は不遇で終わる生涯となった。

さらに為頼は近親者を失うことが多く、それもあって『為頼集』では哀傷歌の占める割合が多い。それを反映して為頼の和歌には無常観や喪失感の影が色濃く刻まれている。⁽³⁾母が藤原定方の娘であったことから、その姉妹の血縁で繋がる交遊圏を形成し、なかでも藤原公任（頼忠息・祖母が定方女）や村上天皇第七皇子の具平親王（祖母が定方女）との交流が特筆される。具平親王家には家司の立場で伺候し、若いころの紫式部は具平親王家に女房として仕えていたとの指摘がある。⁽⁴⁾

家集として『為頼集』が現存する。伝本はすべて同一系統で、『新編国歌大観』第三集と『私家集大成』中古1の底本は三手文庫本（申・二一〇）で、江戸初期の写本である。冷泉時雨亭文庫蔵本の『為頼集』（『平安私家集 十一』所収）は真観の書写になる鎌倉中期の書写本で、貴重な本ではあるが、歌数全八六首のうち四九首のみの所収である。また為頼集の古筆切としては、藤原光俊筆為頼集切、伝甘露寺資経筆為頼集切が存する。

本稿で考察する『為頼集』第82・83番歌の唱和は、一条の大殿おとど（藤原伊尹）が逝去したのち、藤原為頼と桃園殿（源保光）が故人と

等が他撰される。村上天皇勅撰の『後撰和歌集』編纂と『万葉集』訓読（古点）のため、天曆五年（九五二）に撰和歌所が設置された時に別当を勤め、『後撰集』以下の勅撰集に三七首が入集する歌人もあった。

源保光は、延長二年（九二四）に醍醐天皇皇子の代明親王二男として生まれ、伊尹と同年である。母は右大臣定方女。天曆三年（九四九）に昇殿し、同五年に文章生に及第。その後は能吏として順調に昇進を重ね、民部大輔・侍従・右中弁・左中弁・右大弁・勘解由長官・式部大輔・藏人頭を経て、安永三年（九七〇）に参議となり公卿の列に加わった。貞元三年（九七八）に権中納言、永延二年（九八八）に中納言に転じ、後に「桃園中納言」と称された。長徳元年（九九五）五月九日に七二歳で薨去。娘が伊尹四男義孝と結婚して一人息子行成をもうけ、外祖父として行成を養育した。義孝亡き後に邸宅の桃園邸を伝領して行成に引き継ぐ。後に行成は先祖供養の世尊寺を建立したことから、この家は「世尊寺流」と号すようになった。

この系図から為頼母（定方女）の姉妹血縁により醍醐源氏の代明親王系を通じて小野宮家、具平親王と交流が深いことが確認できる。『公任集』第二二八番歌に公任が亡き保光を偲ぶ哀傷歌があり、続けて翌年に為頼が法性寺の法華八講で詠んだ歌がみえる。

〔資料二〕『公任集』第二一八・二一九・二二〇番歌

世中騒がしかりける年、常にありける人多くなくなりて
後、神無月のつごもり方に白川に渡り給ふに、紅葉（源保光）の一本
残れるにつけて、常に文作り歌など詠みける源中納言など
思ひ出られて、いとあはれにおぼえ給ひければ（公任）

218 けふ来ずは見でやままし山里の紅葉も人も常ならぬ世に

又の年、法性寺の御八講の日、

為頼

219 世の中にあらましかばと思ふ人亡きが多くもなりにけるかな

返し

（公任）

220 常ならぬ世は憂き身こそ哀しけれその数にだに入らじと思へば
詞書に「源中納言」と記載されるのみで保光の歌はない。この
「世中騒がしかりける年」とは疫病流行の年で長徳元年（九九五）と
思しい。この年死去した公卿は、道隆・道兼・道頼・朝光・濟時・
源重信・源保光・源伊陟（これた）がいる。

二、「為頼集」第八二番・八三番の唱和の翻刻と校合

本稿で考察する『為頼集』第八二・八三番歌の唱和について、現存する写本と刊本を翻刻すると以下のようになる。〔資料三〕では改行を／で示し、〔資料四〕では詞書の空白一字分を□で表し、校異を太字で示した。⑫の傍書「羊」は「群書類従本」の略と思しい。

〔資料三〕『為頼集』第八二番・八三番唱和

①宮内庁書陵部本

一条のおと、かくれたまひてのあき／いつれのなつにか
も、その、との、／おはしまししおりをおもひいて、／あ
はれにきこえしに

82 大かたの秋とみるたにはなす、き／うへしきみゆへそてそつ
ゆけき

との、かへし

83 うへをきしおはなにか、るしらつゆの／きえぬさきにそまつ

まねかまし

②三手文庫本

一条のおと、かくれたまひての秋／いつれの夏にかも、そ

の、殿をはし／まし、おもひ□□□□かりきこえしに

82 おほかたの秋とみるたにはなす、き／うへしきみゆへそてそ

つゆけき

との、御かへし

83 うへをきしをはなにか、るしらつゆの／きえぬさきにそまつ

まねかまし

③山口県立図書館本

一条のおと、かくれたまひての秋／いつれの夏にかも、そ

の、殿をはし／まし、おもひ□□□□かりきこえしに

82 おほかたの秋とみるたにはなす、き／うへしきみゆへそてそ

つゆけき

との、御かへし

83 うへをきしをはなにか、るしらつゆの／きえぬさきにそまつ

まねかまし

④ノートルダム清心女子大学図書館蔵(黒川文庫本)

一条のおと、^かのくれ給ひての秋いつれの夏にかも、その、

／殿おはしまししくおもひ

82 おほかたの秋とみるたに花す、きうゑし君ゆゑ袖はつゆけき

※「おもひ」以下欠脱

との、御かへし

83 うゑおきしをはなにか、る白露の消ぬさきにそ先まねかまし

※和歌一行書「うゑし」・「ゆゑ」と歴史的仮名遣いに修正

⑧群書類従本

一条のおと、かくれたまひての秋いつれの度にかも／もそ

の、殿をはしまししくおもひ

82 おほかたの秋とみるたに花す、きうへし君ゆへ袖は露けき

※「おもひ」以下欠脱

との、御かへし

83 うへをきし尾花にか、る白露の消ぬさきにそ先まねかまし

※和歌一行書

⑨統群書類従本

一条のおと、かくれたまひての秋いつれの夏にか／も、そ

の、殿をはしまし、おりをおもひいて、あ／はれかりきこ

えしに

82 おほかたの秋とみるたに花す、きうへし君ゆへ袖はつゆけき

との、御かへし

83 うへをきしおはなにか、る白露の消ぬさきにそ先まねかまし

※和歌一行書

⑩冷泉時雨亭文庫本

一条のおと、かくれたまひての秋いつれのなつにかも、

その、との、おはしまし／しおりをおもひいて、あはれか

りき／こえしに

82 おほかたのあきとみるたにはなす、き／うへしきみゆへそて

そつゆけき

との、御かへし

83 裁をきしをはなにか、るしらつゆの／きえぬさきにそまつま

ねかまし

⑫京都女子大学図書館蔵（谷山文庫本／岩崎美隆旧蔵本）

一条のおと、かくれたまひての秋／いづれの夏にかも、その、殿をはし／まし、おもひ□□□□以下半紙かりきこえし

82 おほかたの秋とみるたにはなす、き／うへしきみゆへそてそつゆけき

との、御かへし

83 うへをきしをはなにかゝるしらつゆの／きえぬさきにそまつまねかまし

以上を基に、本文の異同に注目して整理すると次のようになる。

〔資料四〕 本文異同の整理

I おもひ□□□□かりきこえしに ②三手文庫本

③山口県立図書館本（三手文庫の転写本か）

⑫京都女子大本（谷山文庫・群書類従本と対校）

II おりをおもひいて、あはれかりきこえしに ①冷泉時雨亭文庫

⑨統群書類従本

III おりをおもひいて、あはれにきこえしに ①宮内庁書陵部本

⑧群書類従本

IV おはしましくおもひ（以下欠脱） ④ND清心女子大本（黒川本）

⑧群書類従本

④ND清心女子大本（黒川本）

⑨統群書類従本

I は欠字部分（□）があり、IIとIIIは「あはれかり」と「あはれに」の校異、IVは「おはしまし、」の踊り字「、」が「く」となり、Vは「袖ぞ」の「そ」が「は」になっている。Vは「つゆけき」とあるから、係り結びの点から見てもとは「そ」であっただろう。

これらを校合すると、本来は「も、その、との、おはしまし、をりをおもひいて、あはれがりきこえしに」（桃園の殿のおはしまし、折を思ひ出て、哀がり）の「出て、哀」が空白部と想定される。

また①書陵部本の「あはれかり」の「かり」は、字母「可」「利」を縦長の仮名書体「に」（字母「耳」）に誤写したものと推測されることから、次のような復元本文が想定できよう。

〔資料五〕 第八二番・八三番の唱和の復元試案

一条のおと、かくれたまひての秋いつれのなつにかも、その、との、おはしまし、をりをおもひいて、あはれかりきこえしに

82 おほかたのあきとみるたにはなす、きうへしきみゆへそてそつゆけき

との、御かへし

83 うゑをきしをはなにかゝるしらつゆのきえぬさきにそまつまねかまし

三、当該唱和の素材と表現

以上の考察から、振り漢字等を充てた唱和本文を示してみる。

〔資料六〕 第八二番・八三番の唱和

一条の大殿隠れ給ひての秋、いづれの夏にか桃園の殿おはしましし折を思ひ出でて、あはれがり聞こえしに

（藤原為頼）

82 大方の秋と見るだに花薄植ゑし君ゆゑ袖ぞ露けき
殿の御返し
（源保光）

83 植ゑ置きし尾花にかかる白露の消えぬ先にぞまづ招かまし

詠歌状況は、一条の大殿藤原伊尹が亡くなった後の秋に、かつて生前の夏に伊尹の邸宅（桃園殿）でそのことを思い出し、桃園殿を伝領した源保光と為頼が、今は亡き伊尹が薄を植え置いていたことを偲んで詠み交わした唱和ということになる。哀傷歌としての素材に「花薄」（尾花）、「袖」、「露」（白露）が用いられている。

「薄」は秋の景物として詠まれ、穂が出ているものを「花薄」と詠み、「尾花」とも表現する。風に靡く有様が人を招いているように見えることから「招く」を縁語とする。また薄に置く「露」が風に吹かれ飛び散ることから、はかなく消えるものとして「涙」や「消える」の縁語として用いられる歌語である。『為頼集』の所収歌で「花薄」「尾花」と「露」は次のように詠まれている。

〔資料七〕『為頼集』所収歌の「花薄」と「尾花」

①花薄 一首

・ 82 「大方の」当該歌のみ（為頼）

②尾花 二首

・ 83 「植ゑ置きし」当該歌（源保光）

・ 三条中納言、津の国に領じ給ふ所に御供にまでて、浜辺
近き所に前栽などをかしきに、枯れたる薄の、上より見
えければ

（為頼）

△85 浜風になびく尾花は朝ほらけ籬に寄する波かとぞみる

85番歌は浜風に靡く枯れた薄が寄せる波のように見えると詠んだ叙景歌である。三条中納言は藤原朝成。定方男で為頼の母方伯父にあたり、延喜十七年（九一七）に生まれ、天延二年（九七四）に薨去。官位昇進に遅れをとった一条摂政伊尹を恨んで憤死し、代々

崇ったとの説話がある。為頼が摂津国に下ったことは76・77番の詞書に見え、いずれも昔付き合つて別れた女を思つて詠んだ恋歌である。

〔資料八〕『為頼集』所収歌の「露」

③朝露 一首

・ 萩に露のかかりて玉かと思ゆるを、折にやりて見るにみな消えてなければ

（為頼）

△61 朝露を日たけて見れば何もなし萩の上葉にものや問はまし

④白露 二首

・ もの思へる女に替わりて

（為頼）

△62 白露の消ゆるを見てもうらやまし萩の下葉に宿や借らまし

⑤露 七首

・ 83 「植ゑ置きし」当該歌

（詞書なし）

（為頼）

4 大方の空の露かは君がため万代かけて置ける菊をや

・ 藏人なる唐物の使に下る、殿上人の饞に替はりて、年返りては冠給はるべかりければなるべし

46 待ち居るもよの露（常）なれやなかなかに年の返らんことをしぞ思ふ

（為頼）

（詞書なし）

（為頼）

54 草枕しのぶるたびに唐衣露にたもとぞあらはれぬべき

・ 妹の老いたるがもとより、年頃の人亡くなりたるを問ひたるに

（為頼）

66 生けらじといふに死なぬ老いの身を惜しむに消ゆる露ぞともがな

年頃あひ添ひたる人亡くなり渡るころ、中務の宮の母の
女御の御もとより

67 この世にて契りしことをあらためて蓮はちすの上の露はちすと結ばん
(具平親王母・村上天皇女御莊子・為頼従姉)

かへし (為頼)

69 はかなくて消えにし露はちすを蓮葉はちすに君し結ばば疑ひもなし

後院の歌合に草むらの虫を尋ぬといふ題を (為頼)

△78 おぼつかないづれなるらむ虫の音を尋ねば草の露や乱れむ

61番歌は、朝に見た「露」が昼には跡形もなく消えていたことをそのまま詠んだ歌である。62番歌は、「白露」が消えて無くなることを「もの思い」が霧散することになぞらえて「うらやまし」と詠んだ歌である。4番歌は重陽の節句で詠んだ歌と思われ、「露」そのものとともにいつまでも置く長寿を祝うものになっている。46番歌は、唐物使として太宰府に下る嫡子伊祐いすけのために詠んだ代作で、伊祐は年明けに藏人から巡爵する予定だった。ただし「つゆ(露)」は「つね(常)」の誤写と思しい。54番歌は、旅の空で袖が涙に濡れる様子を詠んだもの。66・67・69番歌の三首は、為頼が長年連れ添った妻を亡くした時に送られた哀傷歌で、66番歌は、消える命を「露」に例えている。67番歌は、具平親王母の莊子女王から為頼に贈られた哀傷歌で、その返歌が69番歌。ともに極楽浄土の蓮の上に置く「露」を素材とする。78番歌は、貞元二年(九七七)八月十五日の三条左大臣(頼忠)前裁合の歌で、前裁で鳴く虫を探して動く、草に置いた露が乱れ飛ぶことをそのまま詠んだ歌である。

このように『為頼集』では歌語のイメージを十分活かすケースと、△で示したように素材としてそのまま詠み込んだケースがある。

また「大方の秋」については、先行歌に次の用例が確認できる。

〔資料九〕先行歌における「大方の秋」

・「古今和歌集」巻四・秋上

(題知らず) (読み人しらず)

185 大方の秋来るからに我が身こそかなしき物と思ひ知りぬれ

・「後撰和歌集」巻七・秋下

相知りて侍りける男の、久しう問はず侍りければ、長月ばかりにつかはしける

右近

423 大方の秋の空だにわびしきに物思ひそふる君にもある哉

ともに一般的な「大方の秋」と今の自分の「秋」を対比させて、際立つ哀しさやわびしさを詠んでおり、当該82番歌と共通する。

「花薄」と「尾花」については、次の用例が確認できる。

〔資料十〕先行歌における「花薄」と「尾花」

・「古今和歌集」巻四・秋上

(題知らず) 平貞文

242 今よりは植えてだに見じ花薄穂に出づる秋はわびしかりけり

・「古今和歌集」巻四・秋上

寛平御時后の宮の歌合の歌 在原棟梁

243 秋の野の草の袂か花薄穂に出でて招く袖と見ゆらむ

・「古今和歌集」巻十九・雑躰歌

七条の後うせ給ひにける後に詠みける 伊勢

1006 沖つ波荒れのみまざる宮の内は 年経て住みし伊勢の海人も

舟流したる心地して 寄らむ方なかなしきに 涙の色の紅

は 我らが中の時雨にて 秋の紅葉と人々は おのが散り散

り別れなば 頼むかけなく成り果てて とまるものとは花薄

君なき庭に群れたちて 空を招かば初雁の 鳴き渡りつつよ
そこにこそ見ぬ

・『後撰和歌集』 卷六・秋中

人のもとに尾花のいと高きを遣はしたりければ、返事に忍

ぶ草を加へて

中宮の宣旨

288 花薄穂に出づる事もなき宿は昔しのぶの草をこそ見れ

返し

伊勢

289 宿もせに植多なめつつぞ我は見る招く尾花に人やとまと

『古今和歌集』 242番歌は、公任の歌論書『和歌九品』⁽⁶⁾の下品中に「この心むげに知らぬにもあらず」の例歌として見える。花薄を見て実感した秋のわびしさをそのまま詠んだものである。243番歌は、薄の穂が風に靡く様を女性が袖を振り手招きする様に見立てたもの。第106番歌は、主のいない邸宅に植えられた花薄が風に靡いて人を招く様を詠んだもので、当該83番歌と共通する発想の歌である。

『後撰和歌集』 288・289番歌は、あなたを「招く」ために「尾花」〔花薄〕を贈ったという趣向の歌である。

このように、本稿で考察した当該唱和の素材と表現は、先行する和歌の発想を享受していることが確認できるから、こうした和歌の表現を技法として十分に理解し、活用した哀傷唱和と言えよう。

ま と め

桃園殿は一条の北、大宮の西にあった代明親王の邸宅で、娘婿の伊尹が伝領し、天禄三年（九七二）十一月一日伊尹薨去後には四男義孝が伝領するが、天延二年（九七四）九月に義孝没後、嫡男行成

を産んだ源保光女の父源保光が伝領した。のちに行成に伝領されて世尊寺殿と呼ばれる。

源保光は長徳元年（九九五）二月に薨去した。母は藤原定方女。

婿の義孝は妹の恵子女王が伊尹との間に設けた甥であるから、保光娘（行成母）と義孝はいとこ同士の夫婦であった。

藤原為頼は長徳四年（九九八）に没した。母は藤原定方女で保光とは母同士が姉妹であることから、保光と為頼は祖父藤原定方に繋がる母方の従兄弟で、伊尹は為頼の従姉・恵子女王の配偶者という関係になる。桃園殿を源保光が伝領したのは、義孝没後の九七四年九月以後だから、当該唱和の史実年時はその秋と思われる。

為頼が詠んだ82番歌「大方の秋と見るだに花薄植えし君ゆえ袖ぞ露けき」は、かつて花薄を植えた君（一条大殿伊尹）を偲ぶ哀傷歌で、「大方の秋」というだけでも物寂しい上、「花薄」がいつそう寂しさをかき立てる。その花薄を植えた君（伊尹）はもういない。それを思うといっそう涙で袖が濡れる、と詠んでいる。

83番歌「植え置きし尾花にかかる白露の消えぬ先にぞまづ招かまし」は、源保光が詠んだ返歌で、為頼歌の「花薄」を「植え置きし尾花」と受け、「袖ぞ露けき」を「白露の消えぬ先」と受けている。桃園殿を伝領した保光が、亡き伊尹の植え置いた尾花にかかる白露を見て感慨深くなり、風に靡く尾花が人を招くように、この白露が消えぬうちに招いて欲しかった、と偲んだ歌に仕立てている。

かつて桃園殿の主だった伊尹が植えた花薄（尾花）の風に靡く様を「招いている」と見立て、涙の露で袖を濡らしながら、露のように消えぬ先に私たちが招いてほしかった、という亡き伊尹を偲ぶ気持ち、先行する和歌の素材を用いて展開させて詠んだ歌となる。

【注】

- (1) 『為頼集』第二五番歌、『拾遺和歌集』第一二九九番歌に所収される。
- (2) 『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー2014)の川村裕子氏記載による。
- (3) 小論『為頼集』における具平親王との贈答歌について―具平親王と公任と為頼の交流を視点として―(『安田文芸論叢』第四輯2022・2月)を参照されたい。
- (4) 久下裕利氏『源氏物語』成立の真相・序―紫式部、具平親王家初出仕説の波紋―(昭和女子大学『学苑』第九三四号 二―一五、2018・8月)による。
- (5) 『為頼集』は、三手文庫本(申・二二〇)を底本とする『新編国歌大観』第三卷私家集編1(角川書店 1985)による。『為頼集』の伝本研究は、曾根誠一氏『為頼集』の伝本(『為頼集全釈』所収)及び『為頼集』の伝本・追考(『花園大学文学部研究紀要』第五二号 2020・3月)の学恩と、筑紫平安文学会編『為頼集全釈』(私家集全釈叢書14 風間書房 1994)の学恩を忝くした。
- (6) 『和歌九品』は久松潜一氏、西尾実氏校注『歌論集 能楽論集』(日本古典文学大系65 岩波書店 1960)による。

【付記】本稿は、同志社大学人文科学研究所第21期研究会第6研究科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号 20K12565「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」(研究代表者・福田智子氏)と同志社大学宮廷文化研

究センター共催で開催された「夏の研究集会」第一日(令和五年九月四日・同志社大学今出川キャンパス光塩館校舎会議室)において、発表題目『為頼集』哀傷贈答歌にみられる「喪失」表現について―第八二・八三番歌の贈答歌を視点として―での口頭発表とご指摘いただいたことをもとに論文にまとめたものである。貴重な学恩に深謝する次第である。

(ふるせ まさよし 安田女子大学教授)